

# 関東地域多摩丘陵における目籠編みの現在

## ——多摩ニュータウン計画以後を中心として——

坪郷 英彦

### 1 はじめに

この小文は農村工芸がその地域の自然や1年の暮らしの中でどのように成り立っていたかを明らかにすることが目的である。これまで、多摩地域の目籠編みは民具調査、市史編纂として多くの報告がなされている。また、目籠編みが作り手の間でどのように認識されていたかを明らかにした（注1）。ここでは多摩市域の目籠編みに注目し、自然の利用形態の一つとして改めて整理することと、自然環境に劇的な変化が生じたニュータウン計画以後どのように継承してきたかについて明らかにする。

ニュータウン計画は昭和40年に計画決定し、昭和45年から入居が始まった。その昭和40年直前まで多摩市を中心としたこの地域は、戦後他地域では顕著であった農業の機械化や生業の大きな変化が起こらず戦前からの自然利用形態が継承されていた。戦後の変化としては食糧増産のための開墾と酪農の開始である。

結果として、目籠編みを改めて江戸時代から現代までの広がりの中で捉えた結果、江戸から東京という大消費地に対して供給し続けていたことを明らかにする。また、材料の採集調査から具体的な自然の利用の仕方を明らかにする。さらに、ニュータウン以後の目籠編みを地域のアイデンティティとして位置づける活動が行政的に行われ、現在まで目籠編みが継承されていることを明らかにする。

地元の人たちは目籠のことをメケエ、メカエと言いつつ言っているが小文では目籠と統一して使う。また、多摩市に限らず目籠編みは多摩丘陵に位置する八王子市、稲城市、川崎市、町田市の各市域で農閑余業として行われていたが、小文では多摩市域に限っての記述を行う。

### 2 自然と生業

#### (1) 自然環境

多摩丘陵は関東山地に接し、武蔵野台地と相模野台地に挟まれる。丘陵はそのまま海側に張り出し三浦半島を形成する。台地との境を丘陵東側は多摩川、西側は相模川が流れる。河川は台地を削り取って段丘を形成しつつ、はるか低い位置を流れる。標高は八王子市御殿山峠213mを最高とし、川崎市、町田市境附近が100mである。多摩市域では多摩川に注ぐ支流として大栗川、乞田川の二つがあり、さらにこの支流に注ぎ込む谷川が幾筋もある。この谷をヤト（谷戸）と呼び、谷戸最上部からしみ出す水を利用したヤトダ（谷戸田）と呼ばれる水田が作られ、川沿いに集落が形成された。地質は三浦層群と呼ばれる地層の上に関東ローム層が3から4m堆積しており、さらにその上に黒色腐植土の層が形成されている。気候は表日本型気候区で冬期の晴天が続きその

ため冬の雪（雨量）が少ない。8、9月は台風を中心として降水量が多く、かつてはしばしば小河川の氾濫を起こした。

(2) 生業

①生業と土地利用

関東地域は山地、丘陵、台地で構成される地形のため水稻は河川の氾濫原に限られ、大部分が畑地として利用された。この地形の上に畑作と養蚕という関東の特徴的な農業が展開された。明治8年の多摩市域を構成する旧八か村の田と畑の構成比をみると、市域全体での田畑の比率が田4、畑6である。多摩川沿いで乞田川の合流地点でもある関戸村は田9.9、畑0.1とほとんどが田であるのに対し貝取村は田2、畑8とほぼ畑で占められている。川沿いの関戸村、寺方村、一之宮村は田の構成比が高く、貝取村、乞田村、落合村、和田村といった丘陵を構成する村は畑の比率が高い（注2）。表1は明治44年の多摩市域の生産品を示したものである。主な産品は生糸33.88%、木炭18.36%、目籠13.3%、米12.16%であり、畑作・養蚕地帯の特徴をよく示し、生糸が第1の生産品となっている。さらに、目籠が木炭に続いて産品としてあがっていることが、特徴的である（注3）。図1は大正10年の多摩市域の地形図である。大栗川、乞田川沿いに水田が広がり、この二つの支流をさかのぼるに従って桑畑、畑が広がる。二つの支流に流れ込む谷戸沿いにも谷戸田が広がる。山からの湧水を利用し湿田が開かれ、古くは摘田と呼ばれる播種法による稲作が行われていた。

品目	生糸	木炭	薪	水	米	大麦	小麦	柿	栗	鮎	練糸	目籠	計
数量	1000	290000	300000 <small>ノ</small>	195000	1200石	1250	600	45000 <small>ノ</small>	400	400	700	700000個	
価額	53500	29000	6000	975	19200	7500	6000	9000	240	800	4900	21000	157915
移出額 構成比	33.88	18.36	3.80	0.62	12.16	4.75	3.80	5.70	0.15	0.51	3.10	13.30	100
仕向先	横 浜 八王子町	府 中 町		八 王 子 町			東 京						

（『東京府南多摩郡農会史』より作成）

表1 明治44年の多摩市域の産品

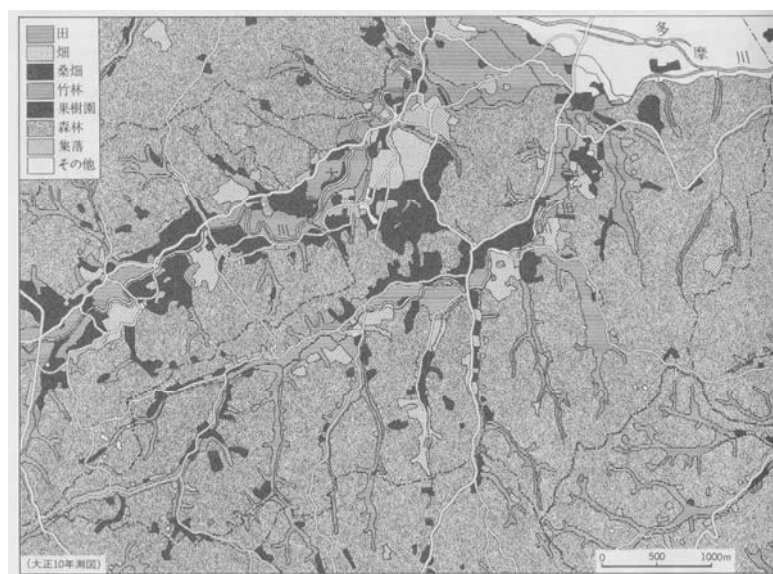


図1 大正10年多摩市域土地利用図  
(多摩市史民俗編から転載)

土地利用は①多摩川及び二つの支流沿いの氾濫原に広がった、水田耕作を中心にした形態、②谷戸沿いの湿田・畑・雑木林の形態及び③台地と氾濫原境のハケと呼ばれる湧水地を利用した形態の3つに分けることが出来る。図2は②谷戸沿いの地形断面を模式的に示したもので一番低いところに谷戸水を利用した水田が開かれ、農道を経て住宅が位置し、その周りに谷戸を吹き抜ける風を防ぐ防風林が設けられる。住宅は水田が出来ない傾斜地に設けられ、傾斜地の上には畑、雑木林が続く。旧家は水利用の便のいい谷戸を控え、谷戸の正面に立つのではなく、豪雨の際の谷戸水を避ける位置に建てられた。その裏山には土砂崩れを防止するための林が設けられ、竹林も筍採取とともに災害防止の役割もある。普段の雨による流土防止のために茶の木、柿、桑の木が植えられた。畑から雑木林に至る間は採草地として利用され、未利用地には薄やアズマネザサが生えた。このアズマネザサが目籠編みの材料として採集された。①河川沿いの氾濫原には水田が開かれ、その間に各屋敷が点在した。多摩川沿いでは屋敷周辺には四方からの風を防ぐ防風林が設けられ、特に強い南風に備えて櫟を植え防いだ。多摩川河岸は堤防が築かれ続いて河岸の砂利を採取する地帯が広がり、その外に水田、人家が位置した。図3は上和田地区の大栗川氾濫原とこれに接する台地の土地利用の様子③を示したものである。図4はその氾濫原すなわち台地下と台地上境のハケと呼ばれる傾斜地の植生を示したものである。ハケ下に水が湧き、その水が集まり池と湿地帯を屋敷内に作っている。水は池からさらに水路の形で流れ出ている。傾斜地のハケには櫟、榎、杉、檜の大木が茂り、その一角にハケ上の家の墓地も位置しており、屋敷林として役割を持っていたことが分かる。ハケ上、ハケ下の屋敷地内には畑、養蚕用の小屋、倉、墓があり、植栽としては防風のための屋敷林を構成する櫟、榎などの樹木とともに柿が多く植えられていることがわかる。柿は禅師丸という種類が植えられ、出荷された。

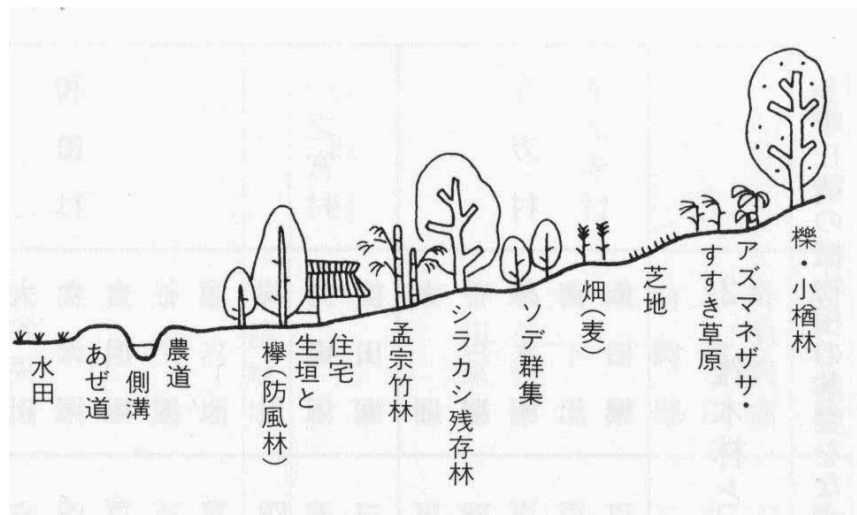


図2 谷戸地形の断面模式図

(多摩町誌より転載)

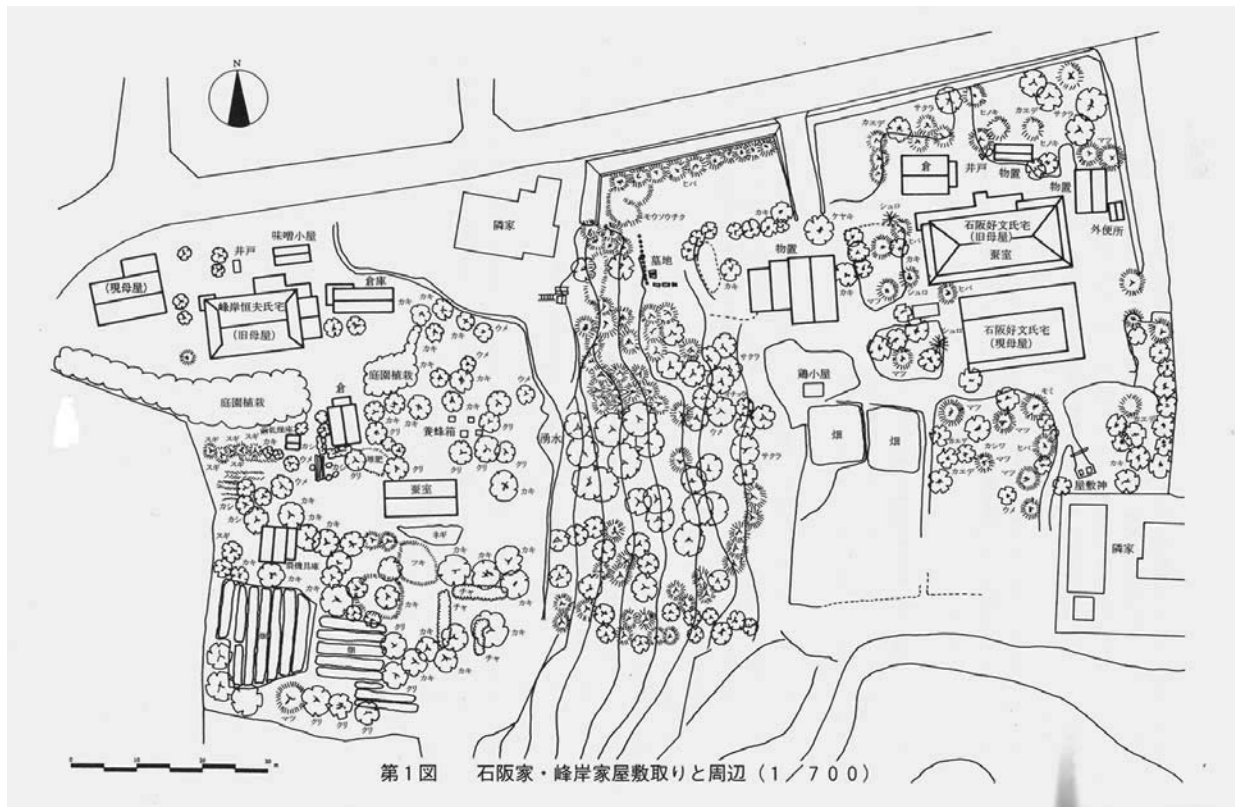


図3 台地地形の土地利用図

「和田西遺跡（植生・民俗編）—上和田土地区画整理事業に伴う植生・民俗調査報告書—」より転載

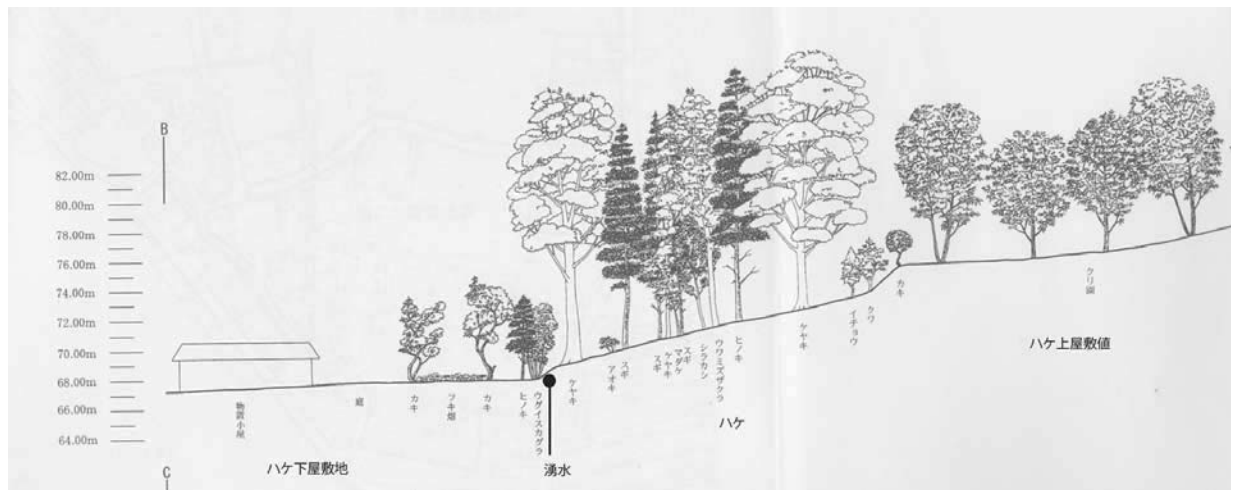


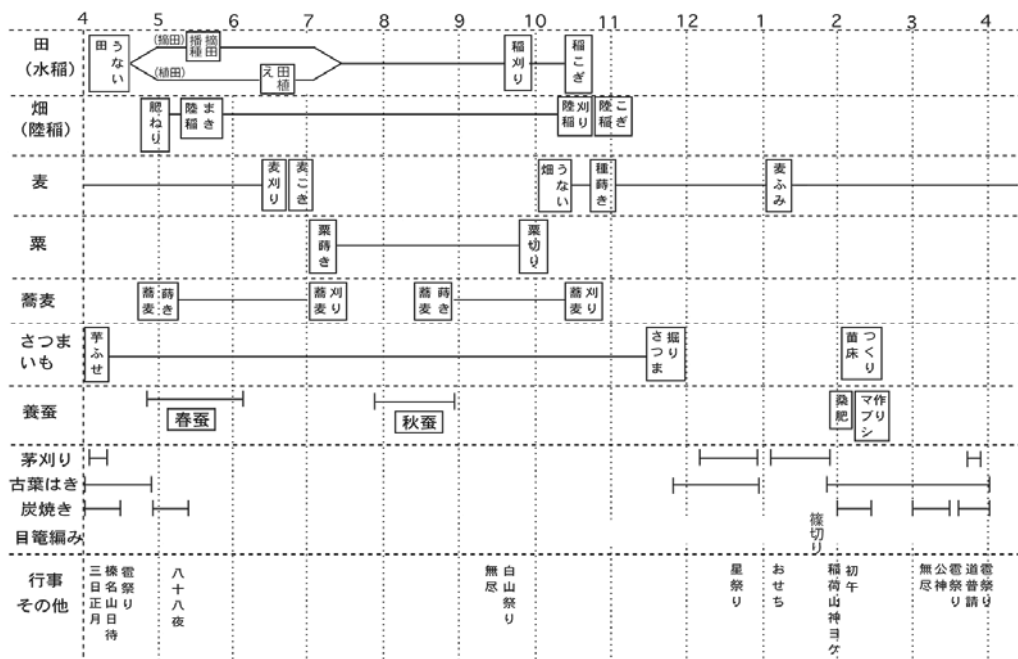
図4 ハケ地形の植生

「和田西遺跡（植生・民俗編）—上和田土地区画整理事業に伴う植生・民俗調査報告書—」より転載

## ②生産暦

表2は大正2、3年に書かれた農事日記「萬年中日記控帳」をもとに1年間の生産暦を作成したものである。「萬年中日記控帳」は多摩市の落合地区中組の峯岸房次郎（嘉永五年～大正十四年）が書き綴ったものである。当時の峯岸家は水田6反、畑1町5反、茅場7反他に山林を所有し、田畑それぞれ3反ずつを小作に出していた。1町5反の畑は山を開墾して得たものであり、養蚕にも力を

入れ、蚕種もとっていたという（注4）。田畑あわせて2町以上を所有する上層の農家である。水田での稲作は摘田と植田のふたつの方式で行われていた。多摩地域では谷戸田での摘田が広く行われていた。大正期は人手も少なくて済み、反当たりの収量も多い植田に移行する時期であったが、養蚕が盛んに行われた頃で、植田での田植え時期と春蚕の上蔭時期が重なることから植田への移行は緩やかであり、水はけの良い田から少しずつ植田に変えられた。脱穀は千歯扱きで行われ、稲こきと記載されている、陸稲の稲こきは11月の終わり頃行われた。麦の種類は大麦、裸麦、小麦であり、大麦裸麦の脱穀はクルリ棒を使っての棒打ちの方法で行われ、小麦は千歯扱きを用いての脱穀が行われた。又、畑では粟、蕎麦が栽培された。家近くの畑では薩摩芋の苗床が2月に入って作られ、4月の芋伏せを待った。養蚕は4月末から6月初旬の春蚕、7月末から8月末の秋蚕の2回で、冬には桑畑の手入れ、上蔭用の藁蔭作りが行われた。春蚕の上蔭、出荷は丁度麦の収穫調整時期に重なり、この時期は女性の蚕雇いを頼み、男手は麦の収穫・脱穀にあたった。麦蒔きが終わると冬の仕事に入り、茅刈り、古葉掃き、炭焼きが行われる。特に茅刈りが毎日のように行われ、また、家の屋根の葺替えの手伝いに頻繁に出ている。目籠編みが多摩地域の主要な副業であったが、この日記には大正2年1月末にしの切りとの記載がわずか1カ所あるだけである。切った籐で目籠を編んだのか、材料として販売したのかはわからないが、いずれにしてもこの峯岸家ではほとんど行われておらず、「上層の養蚕、下層の目籠編み」の慣用句に従うものと思われる（注5）。養蚕を行う為には人的、金銭的、空間的資本が必要で、当たり外れのある投機性の高い副業であったが、順調に飼育が進んだ場合の収入は大きかった（注6）。これに対して目籠編みは、資本は人的なものだけで、当たり外れという投機性は低かったが、多くの労力を投入しても儲けはわずかであった。メカゴの注文は各地から多くあり、集荷を仲買人がこなすために、先に金を置いていって、期日までに納品してもらうという方法が、特にお金が入り用になる年末に行われた。正月に長靴や酢蛸を買おうとって家族で頑張った、三つ星が西に傾くまでやった、夜遅くさつまいもを一焼食べて1時か1時半頃寝たという伝承が聞かれた（注7）。



大正2・3年の農事日記峯岸房次郎「萬年中日記控帳」をもとに作成。

表2 多摩市域の大正期の生産暦

### 3 多摩地域目籠編みの沿革と広がり

目籠編みは江戸時代末期から多摩丘陵一帯の村々で行われていた農閑余業で、八王子市宇津貫で江戸時代行われていた記録から跡づけることができる。天保14年（1843）の「農間渡世向名前書上帳」で策目籠渡世の者宇津貫村5名、大船村、新横山村各1名の名が挙がっている。昭和10年に出された東京府史第3巻には南多摩郡由木村（堀之内・大塚・南大沢他の小字）における竹細工は嘉永年間（1848-1855）田口久兵衛が同郡由井村（八王子市打越・宇津貫他の小字）から伝習して製造したこと、多摩村へは70年前（慶応元年1865年頃）由木村より伝えられたこと、由木村多摩村は全村の7割が竹細工に従事している状態であることが記されている。明治期の活動の様子を記したものとして、明治20年（1887）の目籠商業連名簿控（田中家文書）があり、当時の仲買の組合が西組の八王子町・八日町・宇津貫村と東組の由木村・多摩村に分かれていたことが分かる。東組の内容は不明だが、西組18名の名が挙がっている。仲買業者は多摩丘陵の産品である繭、絹とともに目籠を取り扱っていたのである。明治以降はさらに多摩地域の東方に広がっていった。潮田鉄雄は七生村明治末期、鶴川村大正初期、稲城村大正後期、稲生村昭和初期にいずれも女性の婚姻によって広がっていったことを聞き取りから明らかにしている（注8）。目籠編みの始まりはどこから技術が移入されたかは不明であるが、由井村宇津貫からであり、明治以降の東への広がりには由木村、多摩村がセンターとなってここから技術を持った娘が広がっていったことが文献から跡づけられる（図5）。

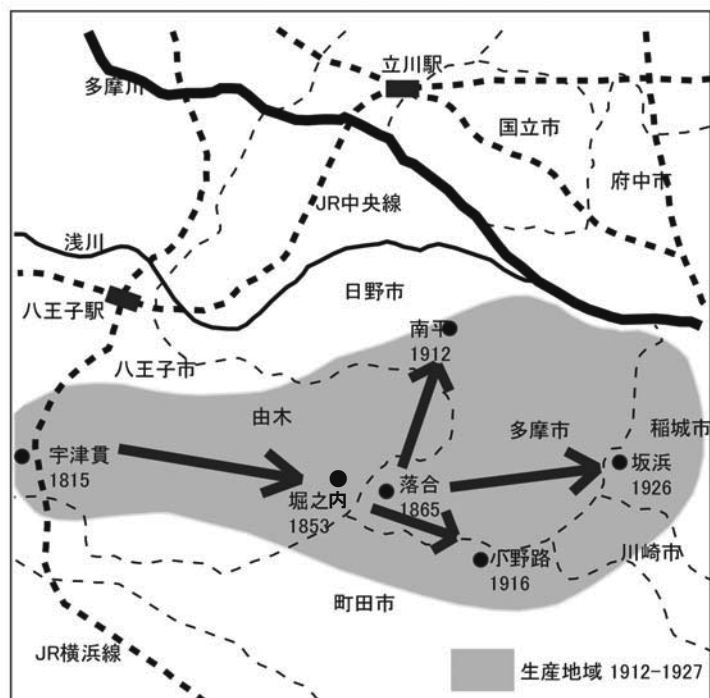


図5 目籠編み技術の伝播

### 4 目籠編みの技術と製品

#### (1) 製作工程

材料としてアズマネザサのその年の春に生えた小指ほどの太さの棹を12月から2月中旬までに採取する。乾かないうちに四つ割りにしてヒゴにしておけば、長い期間保管でき、編む際には水に浸して使用する。アズマネザサは学名で一般的にはシノダケあるいは単にシノと呼ばれる。編み方の丁寧な製品であるジョウメズの工程を表3に、製品の部分名称を図6に示した（写真1）。

工程は大きく材料の採集、篠竹の節についた袴をとる皮むき、篠竹を四つ割りあるいは六つ割りにする篠割り、割った篠竹を皮と身に裂き分け、ヒゴを作る篠剥ぎが一まとまりの作業で、篠竹が乾かないうちに行う必要がある。ヒゴは目籠編みの人たちの間ではヒネあるいはヘネと呼ばれる。編み始める前には束を揉んで剥いだヒゴの両側の角を落とし、水に浸して少し柔らかくした状態にし、底編みから始める。底編みのことをシキフミと地元では呼ぶ。編み方は六つ目編みだけの一つの技法である。作る製品によってヒゴの長さとお数が決まっており、ヒゴ3本を3角形に組み続けることで、六角目のシキ（底）が出来上がる。次には側面を編み上げるために平面に編んだシキの腰を立てていく。その際六角の底の角になる部分の目を五角になるように編むことによって自然と腰が立っていく。角を五角に編んでいくことをクズシメドという。立ち上がった腰は所定の段数ほど六角目に編んでいき胴を作る。これをヨコ廻しの工程と呼ぶ。ヨコ廻しが終わるとフチ巻に入る。幅広の篠竹の身の部分を縁になる円周の内側に宛て縁竹とし、編み上げてきた六角目のヒゴをこの縁竹に沿わせるようにしながら、あらかじめ用意したフチ巻用のヒゴでその上を巻いていく。一般的には巻縁仕上げと呼ばれる技法にあたる。フチ巻竹に使用する材料はマジノ（真篠）と呼ばれる親指ほどの太さの篠竹である。一本で縁を巻き上げるために長い竹の皮部分だけを利用する。以上で一通りの形が出来上がるが、ジョウメズの場合は底及び胴の補強用にスジ（力竹）を差し込む。六つの角をカバーするように3本のマダケあるいはマジノで作ったスジを差し込む。表3の工程表ではマダケでのスジ作りが記載されている。最後に底から胴へ立ち上がる角の部分をヒゴでかがって角の補強とする。この工程をシリカガリ、ケツマキと呼ぶ。



写真1 ジョウメズ3つ組み

上目詰まりの目籠という意味。2つ組み、3つ組みで出荷された。

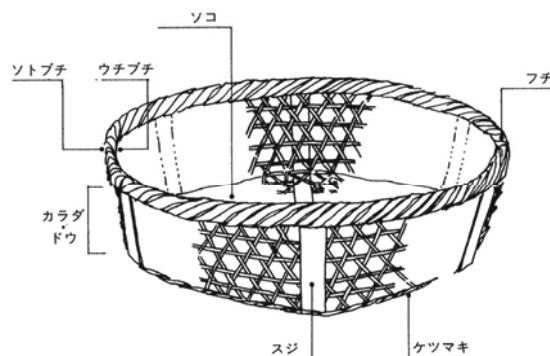


図6 目籠の部分名称

作業番号	作業内容	前作業	後作業
0	開始		1・2・26
1	シキ用ヨコマワシ用材料の採取	0	3・4
2	フチマキ用材料の採取	0	5
3	シキ用材料の寸法切りと皮むき	1	6・7
4	ヨコマワシ用材料の皮むき	1	8
5	フチマキ用材料の皮むき	2	9
6	シキ用材料のシノワリ	3	10
7	シリカガリ用材料のシノワリ	3	14
8	ヨコマワシ用材料のシノワリ	4	11
9	フチマキ用材料のシノワリ	5	12
10	シキ用材料のヒネヘギ	6	13
11	ヨコマワシ用材料ヒネヘギ	8	15
12	フチマキ用材料のヒネヘギ	9	16
13	シキ用ヒネの乾燥保管	10	17
14	シリカガリ用ヒネの乾燥保管	7	19
15	ヨコマワシ用ヒネの乾燥保管	11	20
16	フチマキ用ヒネの乾燥保管	12	21
17	シキ用ヒネを揉む	13	18
18	シキ用ヒネを水に浸す	17	22
19	シリカガリ用ヒネを水に浸す	14	31
20	ヨコマワシ用ヒネを水に浸す	15	23
21	フチマキ用ヒネを水に浸す	16	25
22	シキフミ	18	23
23	ヨコマワシ	20・22	25
24	芯作り	12	25
25	フチマキ	21・24・25	30
26	マダケの調達	0	27
27	タケワリ	26	28
28	タケケズリ	27	29
29	タケマゲ	28	30
30	スジイレ	25・29	31
31	シリカガリ	19・20・30	32
32	終了	31	

表3 ジョウメズの制作工程

目籠編みの材料、工程全体は複雑なものではなく、使う材料は1年生の篠竹と林を形成している7, 8年生のマジノの2種類である。編み方は六つ目編みの一通りで、フチ巻も巻縁仕上げだけである。篠竹の長さを変え、形の縦横比や、ヒゴの太さの違いから出来上がる六つ目の大きさの違い、補強する力竹の有無で多くの種類の製品を作り出した。目籠作りは農閑余業として多摩地域に展開したが、高度な熟練を要しない技術から始めることができるため広がっていったといえる。その品質はヒゴ作りと六つ目編みの程度によって差異化されたが、いずれも女性の手の細やかさによって生み出されるものであった。作り手は材料を揃えるとき、製品を編むヒゴの長さとお数で



覚えていること、ヒゴの長さは手の握りの数で覚えている。さらに重要なのはヒネ剥ぎで出来るヒゴの厚さで、経験者は剥いだヒゴのしなやかさで使いやすいヒゴを表現する。ヒゴの長さや本数は知識として覚え、剥ぐヒゴのしなやかさは繰り返しの経験によって身体感覚として記憶されるものである。少ない材料と技法を身体感覚として覚えるためには一定の訓練の手順があり、細やかな仕事は女性というような老若男女の仕事の区別がなされていた。これら目籠編みが家庭内でどのように役割分担され、又、子どもがどのように技術を覚えていったかの民俗技術についてはすでに報告したところであり、製作の場の重要性も指摘した（注9）。目籠編みは地域での相互扶助とは関係なく、全くの現金収入を目的とした家内工業として展開されたことも明記しておかなくてはならない。

## （2）自然利用体系の中の位置づけ

雑木林や谷戸田といった自然の植生の中で、材料のアズマネザサがどのように生え、自然利用の循環の中で採取したのかを知ることは地元の人々が周囲の自然をどのように理解していたかを知ることにつながる。平成9年にまとめられた平成7年・8年目籠調査報告が未刊行ではあるが多摩市文化財係に保管されており、その中に材料と材料の採取について詳細な報告があるのでその概要を記す。また同報告書ではニュータウン以後の公民館、児童館活動についての聞き取り調査も行っており、5章ニュータウン化以後の自然と目籠作りで取り上げる。

材料とその採取についての話者は小泉勝一氏（大正9年生まれ）である。材料はコジノとマジノで、主にコジノでヒゴを作り籠本体を編み上げる。コジノは膝の高さのものを切る。原野を刈り払うと笹（アズマネザサ）が生えてくるが、そのまま更新して3年たった群落に材料に適し、3年笹という。そこにその年生えた、葉が先端部分だけついた棹を刈り取り目籠編みに使う。日向の土地の笹はヒナタゴといい、粘りがなく細工に適さない。北向きの茅場のシノ（篠竹）が良い。ニュータウン開発が進んでも、以前良いシノが出たところが残っていれば、そこで採取している。その場所に行っても良いシノとそうでないものを見分け、1年生のもので背が高く曲がらないで育っているものを選ぶ。

南向きの山は檜・檜・檜の雑木林で、一定のサイクルで薪炭作りのための雑木の伐採がなされる。毎年下草の笹が刈られクズと一緒に丸めて家に持ち帰られる。日陰の山は放置され笹が育っていくが、5年たつとモヤと呼んで、刈って家に持ち帰り、ヒジロ（イロリ）の燃料とした。目籠作りにはその前の3、4年生の笹の中から生える篠竹を刈って使った。

マジノは仕上げのフチ巻に用いる。マジノの決まった群生地があり、近くでは真光寺地区に40年から50年生のものが生えたところがある。マジノが手に入らない場合はコジノの太いものやマダケを使う。この2つとは別にヤジノという葉の大きい種類があるが、節の間隔が短く、目籠作りには使わない。

以上が小泉勝一氏の話である。2章（2）①生業と土地利用で谷戸沿いの丘陵地の土地利用を示したが、加えて雑木林の利用のサイクル、籠作りに適した材料の生育するところといった細かな自然の利用体系があったことが理解できる。日陰の山で、杉、檜や松といった黒木を育て更新がないところの周辺や、屋根材に適した茅を採取する茅場の周辺に出来る笹の群落を採取していたこと、笹の群落も生育年数によって利用の仕方が違っていたことが明らかである。

### (3) 製品の種類と商圏

多摩市域で作られていた目籠製品を表4に示した。家庭の台所用、魚屋、市場での貝洗い用、養蚕用、料理屋の調理用、製茶用、商店の景品用など多岐にわたる製品が作られていたことが分かる。そして、目詰まりの品質の高いものと雑な作りのものにも分けられる(写真2・写真3)。これらの多くの種類はそれぞれ製作する地区で得意なところがあったようで、落合地区は上質の製品を作っていたとの伝承がある。また、この小文では取り上げていないが、八王子市宇津貫地区も上質の製品を作るところで、チャボン(茶盆)を作っていたという伝承がある。なお、ヒラダイは本来は下に台のついた形であったということから、チャボンがその原型であったと推察される。

	製品名		寸法	用途他
1	オオヒラ	大平	直径8寸	雑な作りのもので、ザクモノとも呼ばれていた。家庭の野菜などの水切り笊としての用途であった。都心や川崎の魚屋や八百屋のお歳暮やお年玉景品として使われた。60枚を一つの縄で束ねヒトッコレと称し商いの単位とした。
2	チュウヒラ	中平	直径7寸	オオヒラと同じ形、用途で、一回り小さい形
3	ヒラダイ	平台	直径9寸～1尺5寸	家庭用の多用途の籠。ヒトッコレを単位として商い。もともとは底に台をつけた、平台付き笊だったのか。
4	ジョウメズ	上目詰	三つ組み、直径：高さ＝1：3	上物目詰み平笊。ヒネの幅を細く薄く剥いて作る上物の笊。家庭台所用、料理屋用うどん笊。
5	コバシラ	小柱	三つ組み、ジョウメズを深くした形	魚屋、市場で貝のむき身洗い。料理屋での貝洗い。築地では振り笊の呼称。
6	ジョウボシ	上星	直径1尺高さ4寸の平笊	里芋、野菜を入れて洗う。激しい使い方のため、補強を入れる。星は目の粗いという意味。
7	チュウボシ	中星	三つ組み	ジョウボシと同じ用途で、少し小さい。目が粗い。
8	ムキミ	剥き身	直径1尺～1尺4寸	東京、川崎、横浜の魚屋が貝のむき身振り洗うことに使う。ヒゴの身側を内側に使うため、貝の汚れが良く取れる。築地でははんぺんを入れる用途に。剥き身篩の略。
9	うどんザル	うどん笊		笊の中にうどんを入れ茹でる道具。
10	ヌカフルイ	糠篩	直径9寸・高さ4寸	蚕坐の稚蚕に糠殻の粉を篩い播記する際に用いる。ヒゴの表皮を内側にして編む。川越、熊谷に出荷された。
11	メフルイ・クワフルイ	目篩・桑篩	目の大きさが1分・3分・5分・8分の種類	掃き立てからの稚蚕飼育時に細かく切った桑の葉を篩い与えるための篩。目の大きさが5種あるいは7種の組み合わせを作った。
12	スクイ	掬い	直径5寸高さ1.5寸	繭から絹糸を取る作業時に鍋の中から繭を掬うのに用いた。一笊に10粒の繭が入る大きさ。マユスクイの略。
13	シキザル	敷笊	底9～1尺、高さ1尺5寸	料理屋で魚の形をくずさずに煮る為の道具。ニアゲともいう。
14	チャシキ	茶敷き	幅1寸の中にヒゴ4本の目	製茶の時に青葉を蒸す甑の底材となるもの。茶産地の篩屋が曲物の縁に篠竹を編んだものを張る。篠竹のヒゴは熱に強かった。コシキとも呼ぶ。
15	コダマ	小玉	直径2～3寸、高さ2寸	料理屋で口取りの料理を盛るための容器。蕎麦屋では薬味入れ。径と高さがほぼ同じなので玉と呼ぶ。
16	ザル	笊	直径1尺	近隣の八王子、神奈川音農家に出荷した普段使いの目替い笊のこと。野菜の水切りなどの台所用。
17	シャクロクスン	尺六寸	直径1尺6寸高さ5寸	大きな平台笊、東京の魚河岸用に製作出荷。
18	オオメカイ	大目替い	4升の容量	東京、横浜の八百屋用に製作出荷
19	ウチワイレ・ウチワオキ	団扇入れ・団扇置き		昭和30年頃考案されたもの。

表4 多摩市域で製作された目籠製品

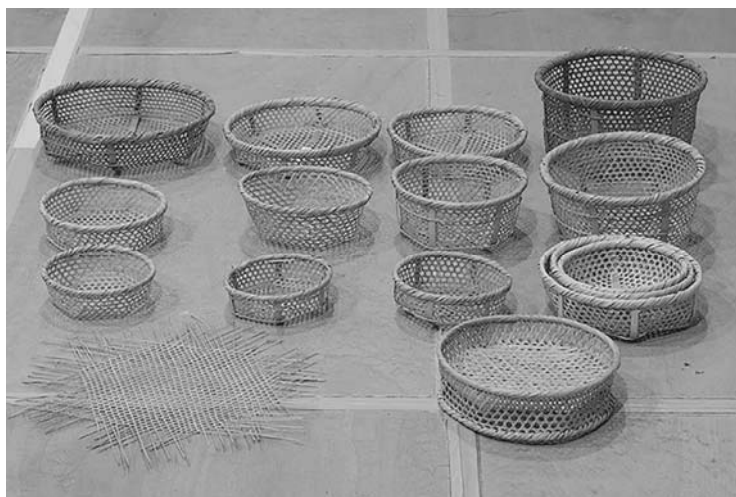


写真2 目籠製品（多摩市に収蔵保管されているもので名称は資料カードによる）  
 最上段左からメカゴ、ヒラダイ尺一、ヒラダイ尺、メカゴ、中上段左からメカゴ、メカゴ、チュウボシ、ムキミ、中下段左からソバ、メカゴ、メカゴ、親中子メカゴ、最下段左からチャシキ、チャボン

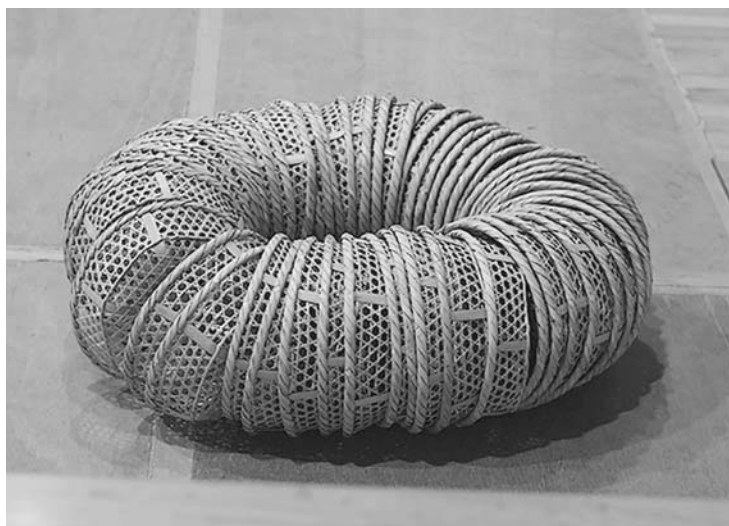


写真3 オオヒラヒトコレ

オオヒラ 60 枚を丸く束ねたもので、ヒトコレと呼び、この単位で商なわれた。

六つ目編みという一つだけの編み方であるが、ヒゴの大きさ、厚さ調整、目詰まりの調整、ヒゴの表皮の表と裏の使い分け、製品の直径と高さの調整、補強（力竹、尻かがり）の有無という細かな技法の使い分けで多様な用途に対応していたといえる。

この表4は平成7年頃の調査で過去に作っていた製品をまとめたものであり、製造品の地区的な異同や時代的变化を統合して並べたものである。

表5は明治期の目籠注文葉書を分析し注文者の所在地と注文件数をまとめたものである。注文葉書は明治16年12月から明治26年5月までのほぼ10年に渡り、多摩村落合地区の目籠仲買人田中善治郎あてに送られたもので全部で318枚ある。多摩市の一地区での取引であるが、落合地区はジョウメズ生産の中心地との伝承もあることから、多摩市域の動向を知る上で重要な資料である。これによると、注文先によっていくつかの注文品の特徴がある。全体的に同じように注文

の多いのが、オオヒラ、チュウヒラで雑な作りのものである。東京市の間屋街からは広く全般的な製品注文がある。川崎町からはオオヒラ、チュウヒラに加えてムキミの注文が多い。静岡市、川越町、所沢町からはオオヒラ、チュウヒラと共に、製茶用のチャシキの注文が多い。川越町、所沢町からは養蚕用具の注文が多い。他の地域からはオオヒラ、チュウヒラと共に養蚕、農作業用の目籠の注文が多い。オオヒラ、チュウヒラ、といった消耗品的に使われる目籠の注文を中心に、東京市、川崎町を中心に上質の家庭用台所用、料理屋専用用具のような都市住民を対象とした注文が基本である。この中には東京湾沿いで使用される貝の処理用の目籠も含まれる。他に静岡及び狭山の製茶産地周辺での製茶用具の注文、川越町所沢町及び東京市周辺の郡部での養蚕及び農業用具が特徴的な注文である。農村部での農閑余業として行われた目籠作りであるが、その商圏は大消費地東京や、製茶、養蚕といった産地化した地域に対応していたことがわかる。

所在地	注文店数	はがき注文数
東京市	9	45
川崎町	6	24
多摩郡	1	18
豊多摩郡	1	18
南多摩郡	2	3
所沢町	2	18
川越町	1	39
静岡市	4	28
愛甲郡	1	3
君沢郡	1	2

(田中家資料明治期注文葉書の分析)

表5 明治期注文葉書からみる発注者所在地

同じ落合地区で目籠仲買をしていた小泉秀次郎・紋次郎の作成した5冊の売上帳が残っている。表書きを列举すると、①明治42年売上帳小泉秀次郎、②大正13年目籠売上、③昭和24年12月吉日栃木県山本様27年9月ヨリ取引小泉紋次郎、④昭和24年東原商店様目籠売上町小泉紋次郎、⑤昭和26年7月吉日石塚商店様、浜田屋様の5つである。④をとりあげ詳述すると、明治42年7月から明治44年1月までの13事業所との取引が記されている。取引先は所在地がわかるものを挙げると、本所・小石川・深川・日本橋・千住・新宿・青山・川崎で、東京の下町と川崎が対象であったことが分かる。取引の月は取り扱い数が圧倒的に12月に集中し、わずかに2月と4月に少し増える程度である。これまでの示して来たように、雑もののオオヒラ、チュウヒラの注文が多く、これに加えてジョウメズの二つ組みないし三つ組みの注文が多く見られる。オオヒラ、チュウヒラは年末年始の商店の景品用でありジョウメズは家庭の台所用である。④大正13年、戦後の④⑤昭和24年26年の売上を見る。月ごとの取り扱い数は明治42年と同じでやはり圧倒的に12月に集中しているが、年代が移るにしたがい取り扱い品目が減っていることとジョウメズの注文数が戦後になって増えていることが分析から明らかである(注10)。消費地江戸・東京の周辺郡部は野菜生産など都市近郊農業を早くから展開していたが、目籠生産も都市近郊農業の一環として位置づけられる。

## 5 ニュータウン化以後の自然と目籠編み

図7はニュータウン開発が進んだ昭和63年の地形図である。具体的な開発は丘陵地・山林部分を東京都・住宅都市整備公団・東京都住宅供給公社が一括買い上げして、大小の集合住宅を建設し、一方集落部分は土地区画整備事業として居住者の3割の土地を開発に適用され、屋敷林・竹藪は取り払われ、屋敷地の形態は大幅に変更される形で行われた。個人墓地や小祠は移動され、従来の居住者は住宅を建て替え、アパートや商店を建設した。丘陵を削り、川の流れを変えた開発であった様相が図7からうかがえる。図1と比較するとその変化がよくわかる。多摩市の平成6年の世帯数は5万4181世帯、人口14万5021人で、第1次入居の始まる昭和45年と比べると世帯数で約6倍、人口で約5倍の増加となった(注11)。

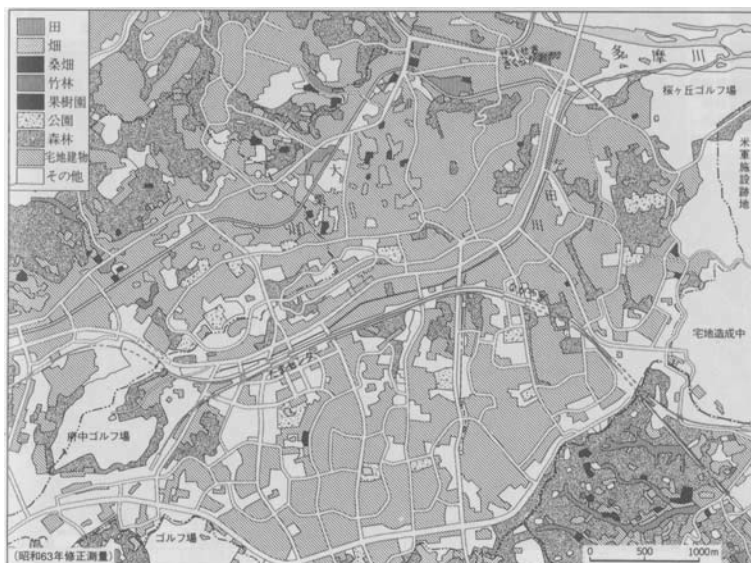


図7 昭和63年多摩市域土地利用図  
(多摩市史民族編から転載)

こうした劇的な空間変化のもとで住み続ける人たちと新しく集合住宅に入居して来た人たちを繋ぐ試みも多くなされ、その中の一つに多摩市社会教育課の企画によるメカイ教室の実施がある(注12)。昭和48年(1971)10月に落合公民館で始まり、講師として地区の古老である小泉ソノ氏、大貫スエ氏など5名が出席した。古老との交流を通して多摩の昔の暮らしを知り、郷土への理解、関心を深めることを目的とした企画であった。目的は新旧住民の交流であり、技術伝承は副次的なもので、目籠編みの技術習得で一番困難なヒゴ作りは講師の古老が準備した。昭和49年には地域的特色のあるものづくりにふれるということで、やはり落合公民館で親子メカイ教室が開かれた。昭和50年からは永山児童館で母と子のメカイ教室が開かれるようになる。目的は材料作りも含めたメカイ作りのできる大人を育て、その大人が子どもを育てるとして、はっきりと技術伝承を打ち出した。講師は最初のメカイ教室と同じ古老5名で、大人が週1回、子どもが月1回の割合で教室がもたれた。昭和51年には子どもメカイ教室が開催され、子どもにもヒネ作りを覚えさせることが織り込まれた。保護者には必ず子どもは手を切りますと伝え、了承を得ての実施であったという。

昭和54年には豊ヶ丘児童館でメカイ教室が開かれるようになり、講師に萩生田長吉氏を招いた。萩生田氏が昭和52年に著した「多摩のめかい」はメカイの製作方法について詳しく書いた内容で

あるが、その最初に多摩のめかい今昔として萩生田氏の経験に基づいてかつての様子が書かれている。その中で重要なものを抜き出すと、萩生田氏は大正3年多摩郡鶴川村小野路生まれで、氏の曾祖父の代からメカイ編みが行われていたこと。メカイの仲買人として、関戸の横倉硯之助、新吉親子、由木の虎さん、和田の作さん、落合の紋治さん、喜三郎さん、小野路の磯さん、大沢の大谷さんの名が挙がっていること、執筆当時多摩市では社会教育主事の宮森さんが中心になってメカイの継承を呼びかけていたこと、メカイ教室の講師は小泉トク、小泉ソノ、小泉アイ、大貫スエ、小泉キミの5名であったこと、本人も30年のブランクがあったが昭和46年に再びメカイ作りを始め、民芸品として評価されてきたことが書かれている。萩生田氏が講師で、受講生であった人たちは経験を積むと、今度は教室の講師となる。昭和59年に萩生田氏が自宅に工房をたて製作に専念するようになると、教室講師が工房に出向き学ぶという形に発展していく。やがて学んだ人たちの中で同好会が豊ヶ丘と永山で結成される。豊ヶ丘メカイ同好会は菊池富士江氏が中心となって、永山メカイ同好会は矢滝三千子氏が中心となって現在まで活動が続いている。豊ヶ丘メカイ同好会は結成後定期的な講習会と共に地域イベントに参加したり小学校での地域学習の講師を務める等の活動を行い、平成30年時点では多摩メカイの会と名称を変え活動を継続している。永山メカイ同好会は恵泉女子大学と連携をしながら活動を続けている（注13）。

順調に展開してきた目籠技術伝承であるが、公民館・児童館でのメカイ教室を開催するも長続きしない地区があった。それは住み続けている人たちには貧しい時代の現金稼ぎとして目籠編みがあったためであるという（注14・15）。地元の人たちには金銭的貧しさと目籠編みが結びつくが、新しく入居した人たちにとっては、手を動かすことを通して地元の人たちとの交流がはかれる大きなメリットがあった。目籠編み教室での交流を深め、「講師のおばあさん達とシノを取りに行く作業は、多摩の自然形態と、それを利用してきた暮らしについて知る絶好の機会となった。」との関係者の述懐がある。

## 6 考察にかえて

目籠編みの基盤となる自然形態との関係及びニュータウン化以後の目籠編みの状況をまとめた。

大消費地や養蚕、製茶という地域産業との関係で成り立っていたという立地の特質が明らかである。江戸後期からの養蚕は現金経済を関東に浸透させていき、繭の仲買の人たちも増え、やがて目籠もその人達によって東京や養蚕、製茶地域に販路を広げていったといえる。養蚕は資産家の家単位の家内工業であり、資金のない人たちは村より家単位で自然の材料を加工して主に冬の夜なべ仕事として目籠を作った。単一素材、六つ目一つの編み方という製作工程をこなすために、効率的な分業体制が取られ、子どもの技術習得にも一定の方法があった。

目籠材料となる篠竹の採取は一定の利用形態があった。山林利用の中心であった雑木林の薪炭への利用のための定期更新の山、すなわちヒナタ山ではない、日陰の山で茅場周辺や杉檜櫟林との境に生じる笹藪の3、4年生の藪でその年生えた篠竹を取るという循環があった。5年生以上の笹藪は伐採されイロリの燃料にする慣行であった。自然環境の効率的利用の特質がみられる。

自然を上手に利用した、貧しい人たちの間で展開された目籠編みであったが、ニュータウン化を経て、今度は多摩の地域らしさを象徴するものとして取り上げられるようになる。公民館、児童館の活動で、地元古老とのコミュニケーションを取りながら、少しずつ技術継承も図られ、少なくとも多摩市域では2つの活動グループが育ち継続している。少なくとも江戸時代末期からの継承の明らかな民俗技術が、地域の自然条件を上手に活用しながら、特に大都市東京との兼ね合いの中

で継承されてきたことは特徴ある点として明記できる。今回は取り上げなかったが、八王子ニュータウンの中心地に宇津貫地区が位置し、やはり地元の方々の熱心な技術継承の努力によって目籠編みが現代に継承されている。この両地域を合わせて、大都市を控えた多摩丘陵地帯の特色ある民俗技術として位置づけてもいいと思われる。

## 付記

小文は、平成 30 年 11 月に多摩市教育委員会教育振興課で企画実施された明治 150 年事業文化財講演会の一つとしてパルテノン多摩で行った講演内容をもとに執筆したものである。構成を考える中で農村工芸の自然の利用体系を、特にニュータウン化で丘陵が失われたところでもあるので、丁寧に取り上げるようにした。筆者が田中宣一先生、藤塚悦司氏と一緒に歩きまとめた多摩市史民俗編さん時の調査をもとに話し、まとめたものである。加えて、現在につながる目籠編みの伝承教室が続けられていることも多摩市の大きな人的空間的環境変化を考える上で重要と考え取り上げた。ニュータウン以後については松本知子の平成 7 年度、8 年度メカイ調査報告書が重要な情報を提供してくれた。講演では地域の方々とともに、メカイ教室で育ち、今は教室を指導している方々も来て下さり、新しい目籠編みの広がりを感じた。講演終了後、永山メカイ同好会を続けている矢滝三千子氏は、新しく多摩市の集合住宅に入り、メカイ教室で学んだ時、講師の古老の方々に編み方を習い、材料採取として丘陵を歩く中で、おばあさんには世間話であったろうが土地の自然、歴史を話され、この土地に親しむようになったと述懐された。暮らしの中の工芸を学ぶ中で、自然に土地の暮らしを学ばれたのであろう。農村で育ち継承された工芸の特徴であろう。今後は八王子市宇津貫・柚木を中心とした地域の技術継承を明らかにしたい。

## 注

- 注1 坪郷英彦、1999 で詳しく論じたデータによる。
- 注2 多摩市、1997、p128、多摩町誌。
- 注3 多摩市、1997、p186、東京府南多摩郡農会史のデータを基にしている。
- 注4 多摩市の民俗所収「萬年中日記控帳」、多摩市文化財調査資料、昭和 58 年、多摩市教育委員会
- 注5 東京府南多摩郡農会史（大正 3 年）には階層を直接国税納付額 50 円以上を上、10 円以上を中、10 円未満を下とし、多摩村では上 4.4%、中 27.4%、下 68.2%の構成比であったと記載されている。南多摩の副業（大正 5 年）によると大正 5 年の目籠従事者は全世帯の 68%にあたる数値が出ている。大正 14 年（多摩町誌）には農業従事世帯の 60%が養蚕、目籠製造が 21%の比率が示されている。構成比に違いがあるが、統計の取り方が違うものと思われる。
- 注6 まだ養蚕の飼育技術が科学的に解明されていない第二次世界大戦前までは、養蚕の結果繭がたくさん取れた場合、当たったと表現された。養蚕の投機性が分かる言葉である。
- 注7 目籠編みに係わる習俗については多摩市の民俗（メカイ（目籠）関係資料）及び多摩市民俗編に詳しく書かれている。
- 注8 潮田鉄雄、1978、1-23、による。
- 注9 女性の技能が優先した農閑余業であり、ヒネ剥ぎは全員、編みは女性と年寄り、フチ巻や

力竹入れは男性という分業体制ができており、子どもが自然に覚えていく順番も決まっていた。子どもがだれが師匠というわけでもなく、自然に覚え次の目標を持って手を動かしていく状況をイロリの場、夜なべ仕事の重要性として指摘した。坪郷英彦、1999、及び Tsubogou Hidehiko, 2011

注10 多摩市の民俗（メカイ（目籠）関係資料）多摩市史叢書（11）、多摩市、平成8年

注11 多摩市、1997、128-133

注12 ニュータウン化以後のメカゴ編みに関する記述は松本知子、1997による。

注13 矢滝三千子氏が平成30年11月10日開催の明治150年事業文化財講演に聞きに来られ、最後に活動の現況を報告された。個展も開催されるなど活発な活動状況聞くことができた。

注14 松本知子 1997による。直接経験者からの聞き取り調査では話が出てこない心情が示されている。

注15 ニュータウン化以後の目籠編みについては恵泉女学園大学の継続的な研究と新たな実践活動がある。篠田真理子他 2013には菊池氏と矢滝氏の技術継承の様子とその後の活動について詳しい記述がある。

## 参考文献

潮田鉄雄 1978『稲城ものづくり（稲城市文化財調査報告書第4集）』

篠田真理子他 2013「多摩地域におけるめかいづくりの継承・活用に係わる基礎研究（その3）」『恵泉女学園大学園芸文化研究所報告「園芸文化」第9号』

谷本寿男他 2011「多摩地域におけるめかいづくりの継承・活用に係わる基礎研究（その2）」『恵泉女学園大学園芸文化研究所報告「園芸文化」第8号』

多摩市 1997『多摩市史民俗編』

多摩市教育委員会 2002『和田西遺跡（植生・民俗編）-上和田土地区画整理事業に伴う植生・民俗調査報告書』

坪郷英彦 1999「在来技術の成立要因の分析-多摩丘陵における編祖技術と自然・社会環境の関係性」『デザイン学研究 Vol145, No, 5』

坪郷英彦・藤塚悦司・田中宣一 1996『多摩市史叢書（11）多摩市の民俗（メカイ〈目籠〉関係資料）』

東京府 1935『東京府史 第三巻』

東京府南多摩農会 1914『東京府南多摩農会史』東京府南多摩農会

———. 1917『南多摩の副業』東京府南多摩農会

萩生田長吉 2016『多摩のめかい』復刊多摩めかいの会

パルテノン多摩 1990『雑木林の人々づくり』

松本知子 1997『平成7年度、8年度メカイ調査報告書』（多摩市役所に提出未刊行）

Tsubogou Hidehiko 2011 “The Mekago Basketry in the Tama Hills Tokyo Area” *Proceedings of Ecological Sustainability and Wisdom in East Asia for the Future The 2<sup>nd</sup> asia anthropology and Ethnology Forum*